

長谷寺本堂の調査

本堂の概要と建築調査 奈良県桜井市に所在する長谷寺は、西国三十三観音霊場の第8番札所として知られている。創建は遅くとも奈良時代であり、『枕草子』や『源氏物語』にも登場する。本堂は、現存する棟札から、徳川家光によって慶安3年(1650)に再興され、中井家大工の作事になることが知られていた。

ところが、天文5年(1536)の本堂焼失後、現本堂再興までの経緯はやや複雑である。すなわち、像高10mにおよぶ巨大な本尊は2年後に完成するものの、天正16年(1588)の豊臣秀長再興、慶長12年(1607)上棟など、文献史料には、被災がないにもかかわらず再興記事が続く。本堂は柱筋がそろわない部分があるなど、やや特殊な平面をもつため、天文焼失後の本堂を中核として残すと考えられてきた(櫻井敏雄『西国三十三所寺院の構成と本堂の特質』『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』(浅野清編)中央公論美術出版、1990)。結論から言うと、小屋の束や貫などに転用古材がみられるものの、躯体に大きな改造や増築などを示す痕跡はなく、本堂の使用法とそれにともなう柱間装置の変更を除けば、現本堂は建立当時の状態をよくとどめている。

平成15年(2003)3月3日、樹齢100年を越えるシイの巨大な木が本堂西北の屋根を直撃するという災害に見舞われた。その修理用足場を利用して本堂の建築調査をおこない、あわせて屋瓦の調査、長谷寺所蔵の棟札や指図、文献史料などの関連調査を実施した。この調査については、『重要文化財 長谷寺本堂調査報告書』として刊行している。本堂の概要を述べるだけでもかなりの紙数を要するので、本稿では本堂の構造に焦点をあてて、その解釈を試みたい。なお、京都知恩院・仁和寺・泉涌寺など、中井家の作事になる類例の調査成果からみて、本堂は、中井家による慶安3年の建築に編年して間違いない。

本堂の構造 本堂平面は、本尊を祀る間口1間×奥行2間を内々陣、それを囲む間口5間×奥行4間を内陣、内陣両側面の間口2間×奥行4間をそれぞれ集会所・宰堂室、これらの前面の間口9間×奥行1間を外陣、外陣前面で四半石敷とする相の間、さらにこの前面の間口9間×奥行3間を礼堂とし、その前面に舞台を張り出す。

構造形式は、内々陣、内陣を含む間口(桁行)7間×奥行(梁行)4間を高い柱とし、入母屋造本瓦葺の東西棟屋根をかける。この部分を正堂と呼称しよう。正堂両側面には一段低い裳階の屋根をかけ、背面両端2間に入母屋破風を付ける。また、外陣・相の間・礼堂部分には、正面に巨大な入母屋破風を見せた南北棟をかけ正堂とT字



図60 長谷寺本堂遠望



図61 本堂西側面



図62 礼堂内部の架構



図63 内々陣正面の空間構成



図64 相の間の架構

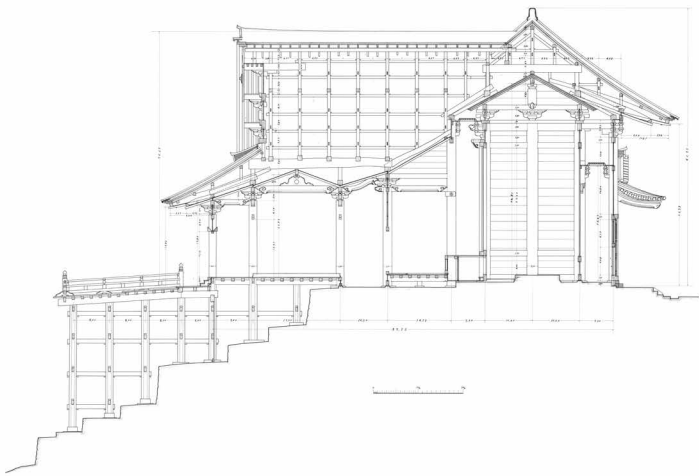


図65 奥行方向の断面図 1:500

形に接続させ、そのまま葺き下ろして裳階の軒と連続させる。礼堂両側面には千鳥破風を設ける。したがって、平面から類推できる屋根形態とは異なる（図60・61）。

内部は、内々陣を切妻型の船底天井とし、内陣には小組格天井を張る。内々陣正面外部（＝内陣須弥壇上部）は、柱を建て登せとし、禅宗様の詰組で出組をつくり、内陣側背面より高い小組格天井を張る。また、彩色・金欄巻柱など本堂中もっとも荘厳に力を入れている部分である。外陣は中央間のみ相の間に落ちる化粧屋根裏とし、その両端各2間には小組格天井を張っている（図63）。相の間と礼堂は、いずれも化粧屋根裏とするが、礼堂中央部の間口5間×奥行2間を切妻型とし、相の間中央5間は礼堂に落ちる化粧屋根裏とするため、相の間－礼堂境の柱筋には谷が生じている。また、外陣・相の間・礼堂の両端間各2間は側面に落ちる化粧屋根裏とするので、中央5間との境になる柱筋では、垂木掛けと虹梁などが上下に錯綜して複雑な架構となる（図62・64）。

本堂の特色とその位置づけ 以上のような複雑な屋根と内部空間を、巧みな技術でまとめ上げている点に本堂の最大の特徴があると言えるが、これは、ひとえに像高10mを越える巨大な本尊とヒューマンスケールの礼堂を、建築的破綻をきたさないよう、調和させた結果だろう。すなわち、本尊厨子とも言える高い内々陣は、その正面となる外陣に化粧屋根裏を採用しないと、本尊の尊顔を拝せなくなる。また、側面の入母屋破風は、現状では内部空間とまったく関係のない構造となっているが、別棟礼堂屋根の名残であることに異論はなかろう。そして、礼堂・相の間・外陣にかかる南北棟は、ほんらいこの

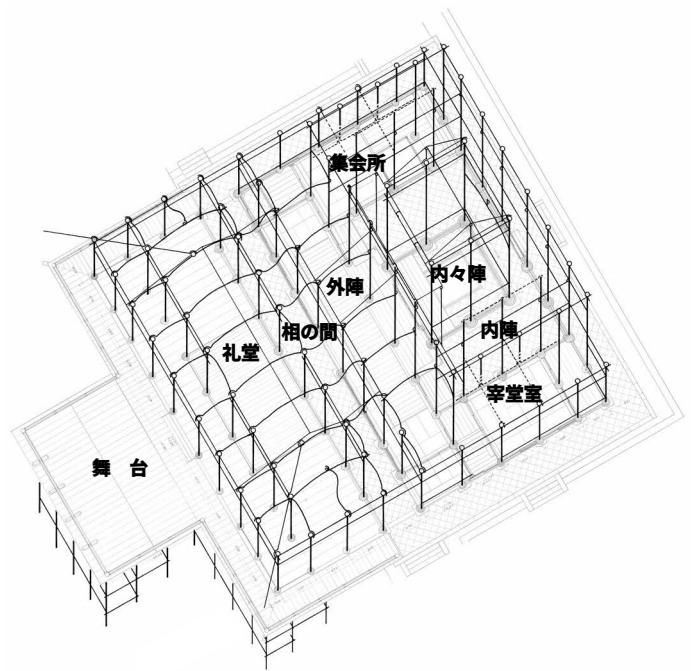


図66 本堂架構図

内々陣と礼堂をつなぐ屋根だったとみられる。正堂の裳階は、集会所・宰堂室平面の拡大とともに、高い正堂の柱の下部を雨からしのぐ機能を期待したものと解され、地形的にみて背面にはあまり必要性がなかったものだろう。室町時代に成立した絵巻物『長谷寺縁起』では、屋根は檜皮葺だが、礼堂と正堂は別棟で、それらをつなぐ正面の入母屋破風も小さく描かれている。

現状の形態は、礼堂側面の千鳥破風のように、屋根を一体化したことによって、やや退化もしくは発達している部分が認められるものの、上記のような解釈を与えることが可能であろう。同時期の清水寺本堂や石山寺本堂といった複合仏堂が、拡大した平面を覆うために屋根が巨大化・複雑化するのとは意味が異なり、機能的な側面を失わずに古い形態をうかがえる点で、複合仏堂の基本形というべき建築と位置づけられるだろう。

今後の課題 まず、本堂の成立過程の究明が挙げられる。とりわけ、外陣～礼堂に見られる間口両端各2間の化粧屋根裏と、外陣の性格については、いくつかの解釈が可能と思われる。一方、本堂は中井家配下の大工によって建てられたことは確実であり、現存する中井家造営堂塔との比較研究という視点も興味深い。さらには、長谷寺本堂の造営に関与した可能性のある中井家の大工・今奥政隆が天和2年（1682）に編した建築書『愚子見記』には、長谷寺の記事も散見し、概ね合致する。このように、『愚子見記』の記載を現存する堂塔で検証するという研究も課題の一つになろう。報告書では、時間的制約もあり十分な考察ができなかったが、本調査がそのような研究の基礎資料となれば幸いである。（箱崎和久）